AL DIMEOLA

ELEGANT GYPSY

AL DIMEOLA

ELEGANT GYPSY

CONTENTS

FLIGHT OVER RIO —— 3
フライト・オーヴァー・リオ

MIDNIGHT TANGO —— 11
ミッドナイト・タンゴ

MEDITERRANEAN SUNDANCE —— 21
地中海の舞踏

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY —— 38
レース・ウィズ・デビル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ

LADY OF ROME, SISTER OF BRAZIL —— 47
レディ・オブ・ローマ、シスター・オブ・ブラジル

ELEGANT GYPSY SUITE —— 51
エレガント・ジプシー組曲

FLIGHT OVER RIO

フライト・オーヴァー・リオ

Music by Mingo Lewis

アルバム『エレガント・ジプシー』の冒頭を飾る、パーカッショニストであるミンゴ・ルイス作の軽快なサンバ。コード・チェンジがほぼG♯m7とF♯7しかなく、やはり他の凝り倒したディメオラの作品群とは違う。ここでは割と自由な空間で強力なリズム隊に支えられて弾きまくるディメオラのプレイが楽しめる。イントロは独特な雰囲気のあるベース・ラインとシンセ主体の演奏。Interludeで一気にミディアム・ファーストのサンバ・フィールが提示される。ここからはほぼギターの独壇場。Aは3つのフレーズからなるテーマ・リフ。キーがBということと、速さに注意して歯切れよく演奏したい。Bからギターのアドリブ。全体に臨時記号が殆どないことからもわかるように、Bのダイアトニックという考え方でやはりドミナント的なフレーズなどは微塵もない。ともあれこの速さでピッキングのつぶを揃えた6連というのは並大抵のことではないが、途中5連表記の部分などさすがに怪しいものもある。このあたりは、ビートへのグリッドは大目に見て"最速"で弾くということでいいのだろう。

G#m7
1.
2.
E
F#
♩=150
F#7
<Guitar>
A

G#m7
F#7

F#7
G#m7
F#7

F#7
G#m7

F#7
G#m7

G#m7
E
F#7

B
G#m7
8va
F#7

F#7

F#7
G#m7
G#m7
F#7
(8va)
G#m7
F#7
F#7
G#m7
F#7
8va
G#m7
G#m7
F#7
G#m7
G#m7
F#7
H
H.C
C
S
T
A
B

F#7 G#m7 (8va)

F#7 G#m7

F#7 G#m7

G#m7 F#7

G#m7 F#7

G#m7 F#7

F#7 8va G#m7 8va

F#7 G#m7

G#m7 F#7

G#m7 F#7

F#7 G#m7

F#7

G#m7 F#7 <Synth.>

F#7 G#m7

F#7
F#7
F#7
F#7
8va
F#7
<Perc. & Drums>
40
40
F#7
♩=115
F#7
<Drums>
<Bass>
Repeat & F.O.

MIDNIGHT TANGO

ミッドナイト・タンゴ

Music by Al DiMeola

タイトルからも連想出来るように、アルバム全体のエアーとして感じられるスペイン系ラテン・フィーリングを代表する一曲。例によって凝った構成と強烈なパッセージ、サンタナを思わせる泣き&ヘヴィ・ギターで聴き所（弾き所）は多い。イントロはエレピの静かなる前兆で幕開け。Aはそのままインテンポでギターのメロが始まる。この部分がタイトルにある“タンゴ”を踏襲したものだろう。Bはサンバになって曲が動き出す。このパートで一旦前奏が終結すると見る。Cの部分、これは次の展開へのインターリュードというものだ。その後のテンポから考察してみるとそれまでとは特に関係ない175位、と、このすなわち後半のテンポでインテンポと取れなくもない。“せーの”でやってる感じもあるので正確にはこうとは言い切れないが、表記の拍数で一応辻褄は合う。要はCの直前のスネアがこの3拍目で聴こえるかどうか、これが結構大事。Cの裏で取るバックのリフと、2拍目から入るメロとで若干スリップ気味に聴こえる面白いリフは、自然な歌い方では裏返る感じになる。ドラムの1拍目と3拍目（スネア）をしっかり聴くとよい。Jなど終結部で盛り上がりも見せるが、何と言ってもこの曲の要点はC～Dではないだろうか。

Dm7 (9)
Am7
Am7
Dm7 (9)
Dm7 (9)
8va
A7
Am7
(8va)
Am7
Am7

Dm7(9)

Dm7(9) Am7

Am7 Dm7(9)

Dm7(9) 8va

Am7 (8va)

Am7 B F

F <E.Piano> G Am7

F
G
Am7
F
G
Am7
F
F
G
Am7
F
G
Am
8va
♩= 175
C
Am7 (9)
G(on A)
2x
(Em7)
Am7 (9)
Em7

Em7

<Drums>

D

Dm7 Am7 Dm7

Am7

E

Am7 (9)

<A. Guitar>

G

1x

G Am7 G

G
F
3
E7
F
3
F
3
E7
F
G
F
<Piano Solo>
16
G
<Bass Solo>
16
H
Am
<E.Guitar>

Am G

Am G

G F

E7 F

F
E7
F
G
(A7)
18
I
A7
A7
A7
1×
<E. Piano>

J

A7 — Fmaj7

2×, 3× 8va

Fmaj7 — B♭maj7

C

Gm7 — A

D

A — F

B♭
1. Gm7
Gm7
2. Gm7
3. Gm7
A
A
F
F.O.

MEDITERRANEAN SUNDANCE

地中海の舞踏

Music by Al DiMeola

“速弾き旋風”を巻き起こした“スーパー・ギター・トリオ”での演奏でも話題になった曲だが、ここではそのオリジナルである『エレガント・ジプシー』でのヴァージョンである。ここでも、“スーパー～”に参加したパコ・デ・ルシアと共演している。パコ・デ・ルシアはもちろん、ディメオラもここではディストーションの掛かったギターではなく、アコースティック・ギターを用いている。ここで行なったアプローチが、今現在のアル・ディメオラの音楽の原点となっていると言っても過言ではない。また、曲の構成がイントロ部分＋テーマ・メロ＋そのコード・チェンジ、と彼等にしてはシンプルなものになっていることもあり、セッションのような割りと気軽な状態でも取り上げられるのではないだろうか。イントロはCmaj7（リディアン）のアルペジオ・パターン。ディメオラとパコでは若干パターンに違いが見られるが、パコの16分の３連は結構効いている。Ｂ７のところのアルペジオはＥm9との見方が一般的かもしれないが…。[A]はテーマにあたると思える部分。ポイントは、やはり後半の16分だろう。ここが決まらないと冴えないだろう。[B]からはおもむろにディメオラのアドリブになる。32小節間はＢｍとＡｍのチェンジ（勿論Ｇmajのダイアトニック）、[C]からは[A]と同様の進行を取る。フレージングのやり方は見ての通りで、Ｇのダイアトニックが殆ど（Ｂ７の時D♯音は３度のコード・トーンである）。Ｃ７は本来Ｃmaj7の代理だが、あまり意識する必要はないと思う。[E]からはパコ・デ・ルシアのアドリブ。[F]では掛合いパターンになり、[G]からは大盛り上がりのストローク・プレイになる。ここでひとつ、パコ・デ・ルシアのタブ表記等には確定し難いものもあり、その点は弾き易さ等を考慮して表記しているので、各自細かい点は検討していただきたいところ。

2.
B7
A' Em
M
(D.S. time Straight)
Em7
A
D7
(M)
C
22
C
B7
B7
1.
Em
M

2.

Em

B7

B7

to Φ

B

Em

Am7

Tremolo

Tremolo

Bm7

Am7

Am7

B7

Am7
Bm7
Bm7
B♭m7
Am7
B7
Am7
Am7
Bm7
B♭m7

Am7 Bm7

B7 Am7

Bm7 B♭m7 Am7

M →

Am7 B7

C
Em7
M
D7
D
C7
26
B7
B7 aug
B7
B7 aug
B7
D
Em
Em
D7

C B7 B7 sus

B7 Em H P D7

D7 C

B7 Em

Em
D7
C
B7
28
B7
E
Em
D
C

C B7

Em (Tap) D

D C

B7 Em

Em D

C7 C B7

C B7

Em D

D C

B7 Em

Em D

C B7

B7 Em

D C

C

B7

Em

D

D

C

B7

F Em

Em
D
C
Arpeggio
Arpeggio
B7
B7
Em
D
C

C B7

Em D

D C

C B7

Em
D
D
C
36
B7
G
Em
Em
D

C

345

123

B7

234

123

Em

123

789

D

123

567

C

345

345

B7

123

234

B7

234

Em

M

M

D.S.

Coda

Em

RACE WITH DEVIL ON SPANISH HIGHWAY

レース・ウィズ・デビル・オン・スパニッシュ・ハイウェイ

Music by Al DiMeola

'70年代後半、アル・ディメオラというギタリストを一躍"速弾きギタリスト"として知らしめる切っ掛けとなったのがこの曲。この曲においては、彼の"速弾き"というものをいかにアプローチするかという点にポイントが置かれている（もちろん現在の彼に対してはこの形容詞はもう当てはまらないことだが）。出だしのイントロでは、ブレーク時にユニゾンのリフをオーバーダブしたりと、フュージョンの枠に止まることのない、相当のインパクトがある（この辺りはハード・ロックの世界にも多大な影響を与えている）。そのイントロ、ベースとユニゾンの低音リフは3連で表記した。符点8分＋16分で表記しようとも考えたが、ちょっと訛った感じと途中で入るコンガの8-6のパターンを意識して、このようにした。この辺は各自のフィーリングでプレイしてもらって構わない。もちろんここが、この曲での最大の難関であるわけで、16分音符のユニゾンは、スピード感があるだけではなく、実際速いし、正確な運指とピッキングが要求されてくるのは言うまでもない。ハンマリング、プリングといった技は一切使われてはいない。Aはこの頃のディメオラの曲に必ずあったパターンである。アレンジ的にはスパニッシュというよりも、当時関わっていたチック・コリアの影響が表れているのだろう。Cからはまたスピード感溢れるプレイに戻る。ここの3連もイントロと同様だ。そしてそのつなぎとしてアドリブと言えるDが出てくる。非常にダイアトニック的なソロで、ジャズっぽい感じとかそういったものが無いに等しいのも、この頃のディメオラである。ともかく、こういう音符をこんな風に弾ける人がいるという事実と、その後の他のギタリストに与えた影響を考えれば、とてつもなく重要な1曲と言える。

39

A
Bm7(9)
Bm7(9)
Bm7(9)
Bm7(9)
Bm7(9)

Bm7(9)
H P
Bm7(11 9)
Bm7(9)
H P
Bm7(9)
Bm7(9)
B
Bm7
Bm7
C
Bm7
3times Repeat
Bm7

Bm7 | 1. | 2. Bm7 W/M | 3.

A(onB) (Bm7(11/9))

W/Long Delay 8va C

D A(onB) (Bm7(11/9))
(Adlib Solo)
C

Bm7

Bm7

Bm7

Bm7 (8va)

E.P.

E Bm7
Bass

Bm7 Em7 Bm7 Em7 Bm7

Bm7
Em7
Bm7
Em7
Bm7
Bm7
Bm
A7
Gmaj
F#7
A7
Bm7
H
A7
Gmaj
F#7
A7
A7
C
C
F

S
G

W/Oct Up Unison

H

C

C.D

H

Gmaj

3times Repeat

A7

Bm7

1. 2.

3.

Bm7

Gmaj

A7

Bm7

H

Bm7
Gmaj
A7
Bm7
Bm7
Gmaj
A7
Bm7
Bm7
8va
Gmaj
C
C.D
A7
Bm7
Bm7
Gmaj
A7
Bm7
(8va)
Gmaj
A7
Bm7
Bm7
Gmaj
A7
Bm7
Gmaj
A7
Bm7
Gmaj
A7
8va
Bm7
C
Fade Out

LADY OF ROME, SISTER OF BRAZIL

レディ・オブ・ローマ、シスター・オブ・ブラジル

Music by Al DiMeola

アルバム中賑やかな中ほっと心休まる憩いのバラード・チューン。2本のオーバー・ダビングによるアコースティック・ギターのサウンドが喧噪から離れて心地よい場へと誘う。メロディ主体のGt-Iは、Rchから主に出力される“ローマの貴婦人”(笑)、バッキング主体のGt-IIはLchからが主で、こちらが“ブラジルの娘”か。もとより、お家芸の“速弾き”はこの場合陰を潜めてはいる。しかもジャズっぽさという点でも殆どその色合いは皆無で、ボサノバでもなく、いわゆるエレガントなディメオラ・テイストがぷんぷん匂う。全体にヴォイシング等、特に難しいことをやってるわけでなく、個人的にはフレージング等も自然にダイアトニックなのが、これに関しては好感が持てる。倍の3連と16分とを、うまく対照出来るとカッコよく弾けるだろう。バッキングの方はハネない8のノリで、自由に弾いていいだろう。ここではいたって普通のコードを押さえているので、テンション等自分なりに工夫してみるといいのではないだろうか。

Bm7
Bdim
B
A
G(onA)
48
A
G(onA)
C
Bm7
Dm7
Dm7 (onA)
Dm6
Dm7

C♯m7 (C♯m7(9) C♯m7) C♯dim

C♯dim H P H P Bm7 (Bm7(9) Bm7 Bm7(9) Bm7) H

Bdim A D

A G(on A)

Simile

A
G(onA)
G(onA)
A
G(onA)
A
A
G(onA)
F.O.

ELEGANT GYPSY SUITE

エレガント・ジプシー組曲

Music by Al DiMeola

曲目に“組曲”という名前が付いているが、この時期のディメオラの作品は、ほとんどが組曲といえる内容で、当然この曲もパターン・チェンジが激しく、構成要素も多く、リハーサル・マークは[I]まであり、同じパターンがほとんど無いという凄い曲である。イントロは和音をミュートでプレイしている。弾き易さを考慮に入れ、このようなタブの位置にしたが、聴く人によっては3、4弦を使ってプレイすることを考え付く人もいるだろう。その辺は各自にお任せしたいところ。[A]はテーマ部。当時のフュージョンをひしひしと感じさせるエレピ、コードにはテンションが加わっているので、演奏にあたっては注意すること（他の曲もそうだが、コード表記は進行表記にとどめているので）。[B]～[D]はちょっと脈絡的に無理も感じるブリッジを経て、[E]のアドリブへ。全体にブリッジ・ミュートをしているようだ。ワウやフランジャー、フェイザー等、その辺のエフェクターが深く掛かっていて独特のサウンドになっている。[F]に突入する速いパッセージは全体に、もうちょっと詰まった感じでプレイしよう。[G]はシンセのアドリブ。ギターはヴォイシングを表記しておいたので、各自思い思いでプレイしてほしい。[H]はひとくくりはしたが、実は細分化も可能。どうでもいいが本当に凄いパターン数である。[I]はイントロ～[A]の再現、及びエンディングとなる。こうしてみるとディメオラは曲自体が、“テクニックの入れ物”みたいになってしまわないよう曲作りを試みた結果、構成の複雑化を生んでしまったともいえるのではないだろうか。テクニックと楽曲。この狭間で彼は、自らの音楽を必至に模索していたのかもしれない。

E
Am7
Bm7
E7
E7
Em7
Am7
G
Fmaj
Fmaj
E(E7)
A
Bm7
Amaj7
F#m7(-5)
H P
S

E C H P Bm7

Amaj7 F♯m7(−5)

E C

E

E C D (W / Mute) B B7(9)

B7(9) A6(9) B7(9)

B7(9) A6(9) B7(9)

B7(9)
A6(9)
B7(9)
B7(9)
1. 2.
A6(9)
3.
A6(9)
(Repeat : 3 times)
C
B7(9)
B7(9)
Asus4
Asus4
H P
D
Bm7
Bm7
A
F#m7(−5)
F#m7(−5)
F#m7(−5)
T
A
B

Bm7
16
E
W/Mute
Bm7
S
H.D
(W/Mute)
W/Mute

Bm7
Bm7
Bm7
Bm7
Bm7
Bm7
< Over Dub (G.) >
< Over Dub (G.) >
Bm7

Bm7

Bm7

Bm7

Bm7

F Bm7

Bm7

Bm7

C D

C D

Bm7

G Bm7(9)

Bm7
Bm7
Bm7
Fmaj7
E7
Amaj7
Amaj7
Amaj7
Bm7
Bm7

Bm7
Bm7
Fmaj7
Fmaj7
G7
Amaj7
Amaj7
Fmaj7
G7
A7(−9)
gliss.
A7(−9)
Dm7
C
D

Dm7

gliss.

gliss.

Dm7

Dm7

H P

H P

N.C. (Break)

Am7

Fmaj7

E7

I

Am7

E7

Am7

Am7

Fmaj

E7

Am7

E7
Am7
Fmaj
Fmaj
H P
E
E
H P
E
H P
C
E
H P
H P
E
Am
Am
F
Am